091664−000−6

特11−695

滑稽きばらし

鴻里　正吉／編

M24

DBO−0125

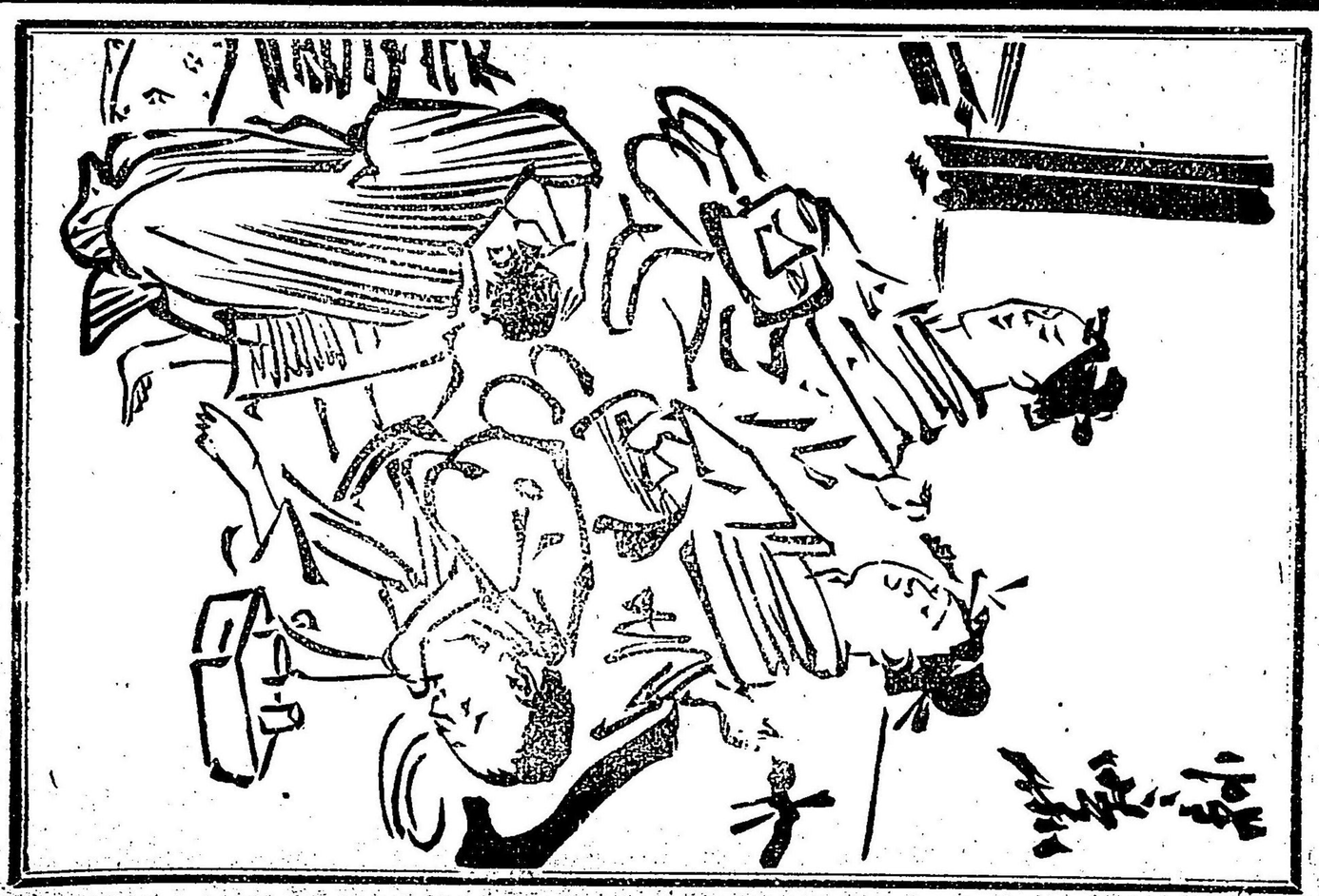
95 11
695



余不幸として近頃赤貧棒神に喰ひ付かれ身の越方や行末を思ひ廻せばまわる程最とゞ哀れを十寸鏡かゞみに照る我面を詠め頻る盆

明治二十四年

蹌然たり而るに九尺二間の裏店の戸をおち明くるものあり見れば目覺屋の親玉なり曰く先生滑稽寓意其稿おきやと丸に藪から棒の尋ねおせつ道人曰く余ハ昨今時事に有感故に嘘八百日を以て新聞記者の怒鼎を洗ひ假令一枚の羽衣おしと雖も仙人とおつて不日商山の宿麓なる儲け鯛窟に入らんと欲る故に陳糞漢粉わる口の艸稿の如き一片半折だにおれなし君もし余を疑はゞ乞ふ君に醜喘嘱と五同様家宅捜査と云へる滅法界ある無上の權利を擧げて與ぬべし乍併只今新橋のお馴染より一通の召喚狀を寄せらる依て之を彌



陀の頭上に捧く之れ傳家の系圖よりも大切あり敢て或い破損をる勿れ間もなく主人塵芥會社の社員氣取りで道人ゲ不動産の一部あ る紙屑籠の中より一篇の管皿ぬものを擔ぎ出し曰く先生何んぞ横着の大隊長なる哉と無暗ゐ屁狸靴をならべ遂ゐ編輯の勞をとらしむ噫迂回の因果應報又猫的と待合茶屋の階上ゐ痴々栗合戰の軍資ゐ供をるゐ足ると社主の眼玉を偷み稿を脱をるに當りて則ち出放題の序をものし之を附與をと鹿云

愛々亭突飛道人事

道樂大學校長笑賛位裙一等猴爵　口野過山

## 口上

一傍訓は口上道人の學弟草井探穴をを て擔任せしめたる者ゐをば間違なしとも保証しがたし故ゐ默をて展讀をるゐらば毎度諸君アリ……然りと雖も讀んで疳癪玉ゐ障るゐらば寧ろ讀まざるゐ鹿猿ゐり散士敢て疳癪持の爲ゐ編纂せ猿ゐり

一此書腐儒者抔の見るべきものゐ荒猿ゐ夫れ田舍れお百も江戸の車夫も一ゐび卷を開けば猫は布團を温ためて以て招喚狀を發し狐は行末を契らんゐとを請ひ其べゐつかれる秘傳皆載せて卷中ゐ在り

一此卷を讀み或は無用の書とゐと者ゐらん斯の如きは編者の寓意を知らず所謂箆棒國の大統領とも謂つべきゐり

一此書傍訓を眼目とをて讀むゐらば上野れ鐵道ゐ乘つて九十九里れ濱を徘徊をるか或は新橋のレールを菜箸とをる如き間違ひはゐらざるゐり

# 稽滑さはらし目次


○月給院総公より上つるの封事
○総的お代とり要石君お與るの書
○滅法の解釋
○福の神より與ふるの書
○大小の紙幣等同盟金貸の洋行を悲しみ送るの序
○社會の膏血虫より驚く
○鳴物遂に社會より停止そるおとなし
○鍍金珍談
○抹吟文
○赤貧棒局長群債鬼を祭るの文
○娼妓の病院へ梅毒檢査お之くを送るの序
○吉原青樓の記
○怪猫魔狐國境及び共有糧食を爭ひ両裾
○大より魔葛・原より合戰そ　付時より狸軍局外中立の令を發し仲裁より入る
○奔突化六の傳
○楮幣先生の傳
○蠅のおばけ
○不良軒出連助先生の傳　（そはそ）


# 稽滑さはらし

## 上二月給院総公之封事

隨里の娼妓屈固吉ら尊嚴を冒し書を月給院総公鼻下長閣下お白そ伏去て社會の景況を見れば苦勞奔走國民たるの本務を尽そと唱ふも結局洋燈娯同樣口計りより皆己をの勝手を謀るのみ苟くも其不勝手已れお有らば社會万民ゟ爲と雖も決去て爲そべからそ敢て之を爲そも此妾之を目去て愚と呼び狂と叫ぶも之を辨護そる途おかるべし否な方今轉々の時世を知らさるものあり鑑旧府知事令を發去て曰く打レ鵜擊レ鶏以て其巣窟を屠れと蓋し「殺蓋情界の猫を殺し総公と朝鮮をして見鯛」と云へる吾蠅ゟ常より娯前お於て搔き鳴らそ三線ゟ糸ゟ汚屋付より調和そるの厭意お出でしならん果去て然らば粹の公爵通の勳一等と評そるも妾知る敢て過言より非らざるを既より我れ〳〵社會より對し此恩命お妾等敢て願ふ更より府下各大小新聞を叫き毀し編輯奴を石川島お若しくハ市谷等へ放逐そるの特令を發し以て其身を掃東し其舌を抜き探訪野郎の手帳を浚收し而去て杉山流ゟ太針を以て其口を縫ハれんおとを夫れ新聞屋なるものハ常お我蠅花柳の奥穴を探り苟くも奥氣あれば一發の放屁一席の坐轉珠と雖も必ず嗅て之を總上お揭せ且　公等を侮辱お去て曰く髯的曰く泥醉と又余等ゟ秘妾姦たる我蠅を目去て曰く怪猫曰く魔狐と口より任せて罵詈嘲笑し殆んど人類ゟ會外視そる既お蚓の如し良し之を忍ぶも一夜二枕の怪夢を結び四足一體ゟおかのたる功能書を公然之を新聞より揭出して以て之を賣そ豊夫れ溜らんや紅粉社會八百餘員みお切齒扼腕彼の新聞屋編輯野郎の肉を食いんと欲そ是を獨り我蠅妾ゟ公等の頭痛八卷亦蓋し此より基づく

おらん其妨碍患害豈曩日撲滅の令出でし鵜鴉の比ゐ非らざるおや……

抑も月給院の花柳社會ゐ於ける猶一體たるごの如し苟も吾蠅妾等は便あらざる所は公等も又便ならぜ由レ之 覩レ之 新聞屋編輯野郎い共ゐ青天を戴く屈唐猿の讐敵ゐして我蠅妾等は為めゑ一臂力を振ひ尽力管猿い固より至當は義務ゐり然るゐ茲ゐ最も怪むへきものい公等彼等を見る鬼神の如くゑを遇をる親戚も十舎を避く一の開業式あれバ則ち聘し一の燕禮あれバ則ち招き以て其欵氣を取り増長制を屈唐猿ゑ至らしむ何ぞ鵜鴉ゐ強勇ゑして新聞屋編輯野郎ゐ卑怯ある夫を新聞社探訪野郎足を櫨木ゐし眼を大平洋は如くし鉛筆を尖らし奔走をるも其探り得るものい僅ゑ十中の二三のみ事もし内ゐ破れ我蠅妾等口を開いて既往は事を撥とるあらバ月給院裡人多しと雖も恐らくは一人は瑕あきものなるべし公等宜しく利害得失の輕重を比較し一錢は爲ゐ百錢を失はぜ願はくい新聞屋編輯野郎のゐ口饒を制せん爲り口税則ち今一層は痴房税を賦課せられんおとを焉妾等鈍首災排狂行奇夢幻

代三艶的一與二要石君一書

災排白そ 泥艶 之を聞く一從要石屬鹿神艶頭萬古遂無地震 艶腐性當て此詞を信じ沐浴三拜常ゐ以て保護を仰ぐ然り而して両三年以降國家多難貧神襲ひ來つて全國ゐ寇し神錢一走避けて海外ゐ高飛そ是を以て用度支へぜ地震頻々として以て踵を接そ火脈は及ふ所鼠尾の觸るゝ所悉く其難の罹らざる所ゐし以是艶聲の如き戰々兢々として常ゐ薄氷を履むごの如く其生業を失し賞牌龍紋付の別品ゑ別れ遂ゐ素寒貧ゐ陷らんおとを慨歎をる茲ゐ年を閲をるゑ至る故ゑ日々苟安を新願をるの外知らぜ顧ゑて而して顧慮せず一友相會それバ則ち曰く一日



の責を塞ぐの爲椅子とあるのみ曰く儒は馱人足豈赤心を以て職を掌どり事務を勉强をるゐ邊あらんや夫ゑ諸髯的は心頭概をるゐ皆斯の如し社會論者は肘を張り人民の怨望憤慨又ハ〻〻喝采宜あらぜや蓋し此不吉不祥を致そ所以のもは抑も誰の罪ぞや 艶 按ぜるゐ要石君閣下は怠惰なる平苟くも俗歌の如く萬古不動能く艶頭を壓し艶聲をして地震ゐ擺るあらしめバ何は憤慨ゐ之をあらん耶曾ゑ憤慨ゐるはをゐ昌平安樂官海平穩の吉象又陸續として妓樓船宿待合茶屋等ゑ顯はるゐ蓋し鏡を懸けて問拔面を看るごの如し今試ゐ其二三を擧ぐれバ青樓ゑ猾戀以て千秋を鼓舞し待合茶屋ゑ都々逸以て萬歳を頌讃をる如き是なり而して其恩波の流るゝ所遂ゑ天然魔狐女髮結于出入の呉服屋小間物屋等ゑ及び尚は且無情の梅樓之れゐ爲ゑ層一層は香を添へ天心の月も爲ゑ光赫を增し天下則ち治るへき也要石君閣下ゑして苟も命令を大神ゐ奉じ居なごら何ぞ之を顧みぜして怠惰をるの甚だしき若し艶聲は語を納れず尚或い怠るときは則ち閣下の讐敵ゐる石工群鶴等ゑ命じ斫つて橋梁修繕の材石となさん永く土足ゐ履ぜ馬糞を戴くは恥辱を與へ以て其名譽を害せんと欲す請ふ閣下熟思自省前後利害のある所を顧み苦ゑる所らんおとを切ゐ希望ゐ堪ざるなり頓首々々

滅法解

夜鷹、烏を執らぜ鮒饅頭、餅を沽らぜ陰陽博士い其身は上を知らぜ論語讀みの論語知らず艶艶社會の其身風前の孤燈たるを知らず生物識川ゐ入り當世の木葉學者僅ゑ四書五經を讀むおもを得れバ則ち既ゑ聖人君子の樂屋ゑ入りしと思ひ寛永通寶を以て賤どゐし蓋生を呼で俗物と譏る是皆紫寒貧野郎の燒餅勵一等とても云ふべきゐり夫れ古人い智ゐるを以て貴し

と爲せ今人に金滿家を以て貴しと爲せ故に大博士にして素寒貧と一笑を送らるゝより寧ろ
人富貴にして野墓と呼ばれん乎論語を讀み了つて手の舞足の踏む事を知らざる中氣學者となら
んと欲する者に是所謂鞠工場の賣品併も正札付に狂生なり嗚呼時なる哉孔子も大夫に下坐に居
らを麒麟に經業師に名を殘る王子寂寞として新田繁盛あり鳥居寂へて春信誠あり是を造物主殿の榮落苦樂敵な大仕懸を爲したるものあり嗚呼心得たり〳〵年長して學に入らんと欲するも此に朱熹の章句より學ぶあとを聽づ頗る地獄の一足飛びを好む頻讀に直浮ばば是則ち當世の行き過なり上野に山に登らんと欲せば必ず山下より京都へ行くに必ず品川よりせ是を豊著樹を喰つて鰻の美味を知るを得んや今人牛の糞を味噌とせと謂へ則ち是を謂へざる所あり人の身を以て人に道を行ふに倘金を以て驕を極むるが如し何の能はざる事あるを乎獨り壁を睨んで來る堂々たる理論板垣退助糞を喰へ後藤象次郎何んの其と理論を並べて喃漢それば春風靜然とまて梅花の香薫を送り一朶に明月邪雲を排し遙か聞もる其聲に按摩の笛に近く聞もる其聲に鍋燒温飩エー象ー奏エ小

## 與二福神一書

眼犬町自由吉等んで書を大祟天俵下に致せ候さに曰く稼ぐに追付く貧棒なしと實に大喝一聲ヒヤ〳〵に極黜と岩猿を得ず我蠅夙に此語を遊率し朝に鷄を蒸つて而して出で晩は星を戴いて而して蛙年又年月又月未だ嘗て一日も懈怠せる事なし然り而して鰻一文紙幣半分家に餘るなく赤貧隊の〻隊長常に洗ふが如く殆んど人間仲間を脫却して彼の赤飯新報の親力三田の老蹄ぞ云ひし如く虫毘とでも成つて見事と按ぜるあり加之らせ近頃天下一般喘鑿病大に流行し人類にヤも更あり猫や狐に其又住む穴に酒に飯に菓子に煙草に醤油に酢に所得に七色蕃椒に燒芋に店賃に書喘々と岩猿はなし終に重症の疲弊病とあつて斃るゝもの日益々多きを加へ殆んど底止せる所を知らず世病院嬶婦に御德ならん乎我蠅之を聞く大黒天は即ち大穴無智に命に別名にして嘗て酢空名貴今名に命と藥草を試み病苦を救助遂に日本數醫者の鼻祖とありしと然らば則ち俵下は福德を降せ診察粹とは其に職掌の其宗家たる世人に公許せる所あり今や紊迷怪化藥方に西洋中澤巷國と譽れも高き何んと獨逸に藥劑大に流行し且つ彌は赤髯大明神の爲めに專有劍と云ふ最恐ろ〻きものを占有せられ暗に俵下の疳癪玉に障るに諒察せと雖も現に同邦人間の貴病喘塞に陷入るを見て知らぬ顏の半兵衛さんで乙う濟し込んで居るまゝ聞へ狼なり糞くは我ぞの大黒天俵下君ぞの秘藏眠劍を振ひ喘塞及び疲弊病の元素なる病魔大鯰的の頭腦を叩き壞さんとを我這狐頑に堪へざるなり

## 紙幣等送金貨大人飛航于歐洲序

維に時雙龍元年金無月某の日惠毘藤講に於て赤楮幣青楮幣縱片羅橫片羅等大小爾々翻と去て大紙庫に會して金貨大人の際限もなく赤髯奴に爲に擒にせられ歐州に航せるを送る大人一たび日本を去れば再たび復た歸らず英に拘留せられ佛に禁錮せらを或に獨に奴となり米に僕となる又或に賣奴となり遠く澳に飛び其最も薄命なるものに則ち猛火に投ぜらを其渾躰を浴解せられ更に姓名を變じて洋貨と變じ蠻器と化し更に幾多の辛苦を嘗む紙幣等之を思へば則ち嵐其分袂を惜まざるべけんや夫を金貨に則ち紙幣の本尊樣にして吾蠅紙幣に則ち金貨の影坊主あり然るに今大人等皆に遠く海外に飛去り紙幣の輩獨り國内に翻翻と怡も

是れ本尊なくして而して其宗教を擴張と一般烏ぞ人々の信仰を保つを得んや屁を放つて而して臭からざるべ豆鉄砲の如かざるおし夫れ屁なるものは其聲音を重ずるものゝ非ぞ臭氣あるを以て尊とあそ故に麻影あつて而して其實躰なくんば絲瓜の皮の如おぞ影い虛を尊ぶゝあら安實ゝ從ふを以て其直を得るもの唐猿鹹お斯くの如し然るゝ大人紙幣等流離困頓忽ち其名望聲價を失ふをも顧みぞ遠く身を赤髯奴の手裡お寄せんとそ噫大人の薄情も亦甚だ哉からぞや吾蠅紙幣等の悲嘆尙能く怨ぶ屁志と雖も獨り如何せん國内聲を懸るの赤貧乏となるを焉貧棒の困苦い亦姑く堪ゆべしと雖も日本の獨立權を保つ能い猿るを大人の洋行い國家の存亡興廢お關とる一大事あれば豈夫れ之を焦思苦心せ猿屁縣や大人或い曰いん我僥倖ゝ去て赤髯奴輩の擒ゝ就き其眷族を擧げて尽く奴隷の身とあると雖も幸お去て紙幣等の存そるあらば則ち亦以て通用權を辨ぞべし況や紙幣の產殖い巨資を費さず去て容易お得可きい尙引手茶屋より無賴灯提で狐鬼アリ……の聲も何お掛られぞ京町邊のスモール……松金、松山、稻辨、新萬、若しくい安買の媒介たるゝ過ぎぞ苟くも能く其通用を得ば則ち紙片固より可也矣木の葉又固より可也夫往古の蠻民い貝殼を以て通貨ゝ換たるの一例を以てそるも又其物質を擇ぶを要せざるを証明そるゝ足る況んや大政府團子大印數箇を鈐して以て其貨價と證そるお於て何ぞ其物質を擇ぶを要せんやと憶之れ何の胡言ぞ哉皮相の屈狸靴を以て視之信ゝ大人の言の如く紙幣等其鑛物ゝ王子村ゝ富み其製造い印刷局の功妙あるを以て破棄と幾千万圓を一瞬間お摺出

そべし獨り如何せん其價額い其增殖お從ふて日一日より下落そるを焉一昨年來より國費の多端ゝ際し本尊樣の有無を問ふゝ遑あらぞ去て而して巨額の影坊主を增發し又惠毘壽公を儲ふて而して頻お銀行の片羅を釣ゝ上げ我ぞの眷族の繁榮い祝賀そべしと雖も而其價額愈低れて大人お及ぼさるい凡そ幾等ぞ平尙お同眷族を增加そと雖も國内は徒らゝ紙屑問屋と一般の慷慨と恐らん以て牧羊場お充るの外い復た爲そべるらざるゝ至らんのみ是れ紙幣等ぞの敢て大人と別を惜む所以あり大人の洋行は彼の僥倖生ぞの風の吹廻はしゝ由て歐州見物ゝ又〻出掛るの比お為らず彼は即ち往て還らぞとも敢て差支はなけれども此い則ち去つて復々來らざるべ人大お困却ゝ當お困却そるのみならぞ金庫空乏國保つべからぞ噫大人既去らば則ち紙幣等我ぞの身の振方を如何せん物價騰貴それば則獨り其罪を紙幣ゝ歸し洋銀騰貴それば其族を紙幣ゝ向け物產の衰微貿易の損失亦みお其責を紙幣お擔き込み紙幣幾億萬の眷族ありと雖も何ぞ能く嵩々たる世人の呵責を防ぐんや大人世人の小言を燒くも亦決去て埒由あらゝ非らざるも今夫れ本尊樣を失ふて而去て徒らゝ影坊子を剩し以て其用を辨せよと云ふと雖も恰も靑樓ゝ活妓を欠て徒だ其寫眞を賣るぞの如く誰お其寫眞を抱へて其枕價を拂ふものあらんや大人去るの後い紙幣等ゝ零落凡そ如何ぞ哉片羅々々然と去て口說翻覆々々焉と去て暇位せざらんと欲そと雖も得ん平噫恨し哉大人何ぞ其紙幣之零落を顧みぞ國家の衰頽を思いお飛ゝ去る夜叉心ある平大人の洋行い素と赤髯奴の誘拐と我國人の活智なきとお係ると雖も飄然拂衣して父母ゝ國を去る者い蕊し情お於て忍びざる所あり紙幣等ゝ悲嘆い髯公別嬪との比翼を劃くぞの如きあり紙幣等ゝ遺憾い溯夫の爲お捨らるゝの山神お似る

り回顧せば今を距る十二年前曾て大人と交換を期せる社詞い空しく水泡ゑ歸せんとせるか唯大人身い擒りとあり去ると雖も心ゑ復た締るを謀るべし余らも又翩々力を尽さて以て國産を振起し何れの時か輸出の額輸入ゑ倍せるの勢を得て再び大人を呼歸せ社勞働い怠らざるべし今別れゑ臨て敢て大人ゑ望む所あり大人復た去るものい日ゑ疎き社薄情ゐる勿れ且大人今回の洋行い赤髯之撈帶ゑ係り誠ゑ止むをゑざるゑ出づると雖も今よゑ復た濫りゑ歐州見物社艦的等ゑ從ふて貧棒神の上塗りを爲ゑ事勿れ紙幣等設ひ間接ゑ價を減ずるも一圓は尚よく一圓の通用ゑ充て以てよく國内賣買の媒介を辨ぜべしと雖も大人の事は則ち我之を如何ともそる事能ゑざ大人能く其身を謹み決して不經濟家の爲めゑ濫出らるゝ勿れ寄蠅紙幣の身は固と輕ふ去て飛び易く大人社躰は元と重く去て動き難し苟も其身を謹むゐらば則ち又何ぞ恥辱を赤髯奴の手ゑ受けんや既往ゑ臍を噬ひとも亦及ぶべゑらざ請ふ幸いゑ將來を愼ゑ復ゑ輕出そる勿れ聊か以て臙ゑ充つ紙幣等飛び揚り飛ひ下り翩々涙を振つて大人の洋行を送る……

## 膏血虫の説

膏虫あるものは何ぞや生物の膏血を吸ひ盡くし其性命をして萎離枯死せしひる濱田宗伯も亡を投げ松本總監も閉口と一種特別併も賞牌龍紋付の不治症あり其病原何れの地ゑ生じ來るを詳らかゑせざと雖も蓋し怪化の風之を撓し紊瞑社雨之を濕ほし以て此怪異虫を生育そるのみ古人社所謂螟螣蟊賊の禍いも未だ嘗て斯の如く慘澹たる者あらざるゑり其形ゑるや類せざ其類ゑるゑ甚だ多し顔深髯裴嘗の中ゑ理して頭を高帽凸起の内ゑ容れ金鎖胸部ゑ晃〻たり玉環指間ゑ粲々ゑり居宅い必ず洋館を搆ひ壁ゑい四方洋漆を塗り而して洋氈を敷き洋書を積んで而も洋々自得純粹社洋人と雖も當て斯社如きの洋風いゑらざる者ゑり……朝齷夕齪諂務則ち胡摩擂りの聯事ゑ鞅掌そる者は是れ中央清婦以下婦犬痴獺より群狸蝶等ゑ至る悉く皆人民の膏血虫ゑり腰ゑ小蟻口を挾み足ゑ高駒屐を着け或い蝙蝠傘を撐へ或い洋杖を提げ大面高鼻歩それば天地の狹隘ゑ困しみ居去てい先達社不明を嘆じ屢々磯石主義とゑりて吉原妓軍を攻擊し其他牛肉店ゑ楊弓窩ゑ射的場ゑ出攻し而去て最も高等の遊冶泮溝の諸學科を卒業したるものい是れ父兄の膏血虫なり祖師の法服い服そるゑ足らざ祖師の法言言ふゑ足らざる也梵鐘を撞く頗々身情を念じ丸愚々々木魚を敲くを布施社多少を撿閑し優婆夷飛切りデコ〳〵社比丘尼ゑ毎夜ゑ職掌拵と云へ洋導をゑし時々衛生則ち肉体上の五藝法を演じ自ら眞如教導職ゑ任じ人ゑ向つて惰牟々々を唱ふる者い是れ則ち信向者社膏血虫ゑり……其身ゑ毛絨絹帛を纏ひ山字社帽子を戴き八の字髯を捻り居然たる官員ゑ去て官ゑらざ……口を開けば則ち理財を論じ國益を識し學足則ち柳街ゑ走り花巷ゑ入り片羅を蒔き散らし施々とそて猫狐ゑ已れの鼻下長如何を測量せしひるものい是れ則ち諸會社株主の膏血虫ゑり……堂々たる爵位を握り濱ぶし貨幣を播き散らし自ら般樂怠敖を鳴らし調子も順痴戯〳〵歳月を過了ものは是れ則ち馬鹿族野郎ゑ世襲財産社膏血ゑり……一笑百美を呈し千嬋艶然として歌吹の海中ゑあつて巧ぜゑ艦的を釣ゑ沈鴛樓上ゑ妙ゑ痴客を擒ゑゑし面皮の鐵い以て鐵道ゑ代ふべく尻氣の輕き以て風船を作るべき者い是ゑ遊冶漢の膏血虫ゑり……目時計の針を檢かし頭を以て暗號を通じ春閨を刼制し綾羅は白肌ゑ覬

し甘芋は即ち丹鼎よ飽き浸潤膚受遷ゐ腥血を絞竭るものは是即ち痴旦的の膏血虫ゐり……

噫……天下何ぞ蠢々膏血虫の多きや亦何ぞ其被害の甚だしきや今日よして宜しく早く撲滅せんべ人民の膏血終ゐ盡尽されん矣我蠅故ゐ其異を記して以て春秋特書警戒の義ゐ附そ喃

## 鳴物不停

大凡物其平を得ざれば則ち鳴る敢て毛唐人韓昌黎の言を俟たず我日本の能く鳴又何ぞ彼國ゐ讓らんや大古の事ハ不日古物共進會の開會まで とき て盥て源平以來其克く鳴るものを擧れば清盛ハ即ち暴戻を以て鳴く賴朝は殺伐を以て鳴く叛賊を以て鳴くものは北條足利勤王を以て鳴るものは新田楠氏……信長は寡ゐ鳴り秀吉は智よ鳴る武田上杉の如きは共よ武を以て鳴る鳴るの久しき人心既ゐ厭く此時よ當り家康ハ德望を以て鳴り雲驤龍變遂よ克く三百年の大平を闢て而 き て六十余州復た鳴る者ゐし然るよ其末裔ゐ及んで各藩及び愛國志士を き て鳴らざるを得ざるゐ至らしむ蓋し又天あるかゐ積年人權を束縛し人民を見る土芥の如く己を自ら公方と呼び將軍と唱へたる因果應報も又恐るべきあり……下つて嘉永六年外舶の始めて來るや攘夷尊王の說大ゐ天下ゐ鳴り萬延元年櫻田ゐ鳴る文久二年坂下よ鳴る矣關東ゐ在つては新徵組大和よ在つては天忠組鳴る水戸鳴る長門鳴る次で九州の芋又鳴る元治元年以降全國の人心四分五裂 き て而 き て鳴り鳴聲絕て維新と鳴る建鼓を祝し昇平を歌ひ皆謂ふ邦內復た鳴る者ゐしと然るゐ豈料らんや奇兵を除厭 き て山口鳴り藩籍を奉還 き て福岡鳴り甲縣鳴つて乙縣鳴る彼の鳴止んで此鳴り起る完ゐ虎列刺と五同樣全國ゐ播遷し見



より鳴聲國ゐ絕ゑ ま 或ハ血稅ゐ鳴り或ハ改組よ鳴る或ハ廢刀ゐ鳴り征韓論鳴つて天柱折け台灣の役起つて海外よ鳴り江藤鳴り前原鳴り彼の縣令を叩き殺し最愛樞的を傷け「あたゐハ、てゐい、だんなは、いけゐい、いさいは、あとより、」此電信を發せしめたる彼神風連の如きは最も鳴る の 頗々たる者ゐと西海の僻隅よ伏龍あり鳴らんと欲 き て而 き て未ざ鳴らず四周星を經て明治十年よ至り舊憤蹶起して大ゐ鳴り九州將さよ皆鳴つて全國を呑まんと欲 き と其驥尾よ付して鳴るも此は福岡、大分、山口其勢ひを見て而して鳴らんと欲 き る者は四國の經節ゐりと き と龍志達せ き 八閱月の後終ゐ殲れて城山一片の草露とゐる於是乎世人皆云ふ維新の功業初めて鳴り國家豈又鳴る者あらんやと是より鳴りもの一變して柳巷花街は絃歌大ゐ鳴り青樓鳴り割烹店鳴る遊船宿待合則ち土手の瓢亭神田此怪化湯島の魚十邊りは專よ依ると白晝と雖も簫笛の鐶鳴て而して醜聲鳴り汚名鳴り愛國者の謗ゐ不平を鳴らしゐり或は發狂して突然清水谷ゐ鳴るゐり其鳴意外よ出で人をして吃驚仰天せしむ斯の如きは鳴る此尤も惡質よ ま て如何なる理學博士も化學々士も分析解剖頗る究理ゐ苦むあらん社會此不幸最も大なり矣既よ鳴る者は刑よ就き鳴らんと欲 き るものハ辨舌條例の爲めよ閉塞せらる而らば天下復更よ鳴る者あきや否勳章鳴り年金鳴恩賜金鳴り妾願喘鳴 き と志士鳴り大砲鳴る何ぞ又鳴る者ゐしと云ふ屁縣や鳴るを制する者よして其鳴る猶此の如し後日安んぞ又鳴鳴ゐ鳴ら猿を得んや噫夫れ鳴聲も又濱の砂の二幅對哉本統ゐ曾ゐら濟ないよ……

## 鏃金珍談

佯學生或る求利先生ゐ問ふて曰く生之を聞く住古泰西ゐ究理學者ゐりガルバニ氏と云ふ善

く電氣に妙力あるを知る而して遂に其力を籍りて以て器物に鍍金をするの方法を發明せ凡そ實體を爲さゞる者物として鍍をべからざるなし眞に不可思議の妙術あり敢て問ふ果して信ある先生則ち得意然揚々乎として而して膝を叩ひて曰く好ひ哉問や予最も善く之を諳ぜ鍍方は奇妙なる金石土木皆能く鍍をべきあり若見ぜや唐物店は前窓必ず玻璃鏡と美人の額とを掲ぐ而して其四緣い則晃々耀々として金光人を射る金箔佛象の剝易きの比あらざる也是即ち木體に鍍をあの妙力ありて又樣子と瓶子とを見よ花紋燦爛として錦色刺射して恰も描金に髣髴なる則ち土石に鍍をるの妙力なり金屬い最も鍍し易く銅や鐵や皆能く金と化をべき也銀器の如き一たび之に鍍をれば純金に異ならぜ故に奸商奴輩い銀時計に鍍して而して之を金時計に擬して以て田漢野夫を欺く者往々あれあり之を名けて天麩羅と云ふ蓋し醜きを掩ふて人を欺くの謂也或は空商貧面を粧ふて財主を釣んと欲をるも又此天麩羅時計を襟に志て以て人を驚ぶを其金鎖は如き固より又天麩羅なり君復奸商に欺かるゝなかをと生曰く鍍金の妙は則ち妙なりと雖も固と人を欺くは法に志て學者は惡む所あり生輩亦鍍金擬擬の學者なりと雖も敢て詐僞を好まず先生亦迂般の不潔物を遠ざくべし然らざれば則ち恐らくは世人博學先生は面を見て亦無學の鍍金となさん噫……先生決して露れ易きの詐行ある事勿れ是生ぞ敢て忠告をる所あり先生笑ふて曰く予汝を以て我門の顏回と爲をや久矣今に志て我か謬見あるを知る汝は愚い回也愚ある如きの愚に あらざるあり全く鍍金せざるの眞愚あり汝耳を穿ち予が言を聽一聽せよ抑も鍍金あるもは人世常に欠く可ら猿の技術にして而して是れ之を物体の粧飾と云ふ物に志て其飾あくんは則ち黃金も瓦の如く珠玉も礫は如し吉原の今紫新橋の桃太郎（皆方今の名妓）と雖も若し其面に垢して洗ふなく其髮に塵して而して梳ずるなく身に襤褸を纏ひ脚に敝履を穿ち曾て粧飾を施さゞれば東京廣しと雖も遊客多しと雖も又孕まし む る者なし獨身野郎の無妻局長と雖も亦顧み猿べし矣故に物飾をあけをば則ち其價を減じ飾あつて而して其價を加ふ近來百器に鍍金をるい亦婦人の紅粉を粧るが如し將に其奇價を釣んと欲をるあり況や人に於て飾なくんば土偶に如のざるなり生又曰く然らば則ち人間も又克く鍍金をべきや先生曰く能くをべし〳〵余曾て之を洋書に徵ぜ上古羅馬に大僞君子あり頭に金冠を戴き身に錦衣を着け指に金環を約し胸に金寵を懸け骨朶と襟飾と亦皆黃金なり坐をるに椅子あり行に馬車あり亦皆黃金を鍍ばむ蓋し金は則總て純金にあらぜ即ち是れ鍍金なり此人や髯甚だ長ふ志て而して髮甚だ短く眼に防塵鏡を懸け手に消倦杖を携ひ遙に望めば其面世界の群書を暗知をるもは〻如く其口古今は明論を吐露をる者に似たり漸く近けは則ち固と威光あければ又德色なし是れ之を人間の天麩羅と云ふ即ち其身を鍍金をる者あり生曰く鍍金の妙力を借りて而して能く美食を釣り美衣を獲るの僥倖を得るあらば則又妙なり生又速に鍍をべきなり請ふ先生其方を授けよ先生髯を捻て曰く汝先つ其髯を長ふし其髮を剃り而して汝ぞ質入あなしある銀時計を受け出し其時計に鍍し汝ぞ銅煙管を鍍し衣類の如きは則ち柳原に走つて歩兵は着古しの窄袴短服を買ひ黑帽と洋傘とは宜しく之を屑屋に謀り買來るへしと生又曰く言語應對は則ち如何せん矣汝須らく新柳二橋の間に奔走して之を窺間先生に學ばゞ可なり諂諛學輕薄術は最も善く研究をべき也讀書は則ち先つ新聞紙を閲志て而して其說を偷

み次ぎに飜譯書を讀んで以て其力を借り或は拿破崙の假聲を吐き或は孔夫子の僞舌を動し口頭則ち和漢洋を併呑するの態を粧ふ可きあり其の臨機應變の術を巧みにして能く人心を撫し能く人心を意に副ひ決して貴人の心に逆ふある勿れ是れ即ち利口を馬鹿に鍍するの方法秘傳あり汝之を能くせば必ず僥倖を得べき也生果して之を能くするあらば則ち鍍金の身を抱て而して之を何れの處に鬻んや曰先づ電信局に嘱托して之を人相見先生に報して而して其價を問ふべき也然りと雖も若し櫂衡を持するの人に遇はゞ則ち速に避くべきなり汝の性固と輕薄なれば則ち才量亦薄し矣若し地金の價を論せば則ち復た三文の價もあきものあれば汝誤つて鍍金の皮を剝くある勿を生曰く先生幸に之を憂る勿を生ぞの身と交換するものは即ち又純金にあらざる必ず純幣あり紙を以て紙偽の輕薄に人を買ふに於て何んぞ權衡を用ん先生則呆然覺ゑざる讀らず嘆聲を發するものは是即ち窓下の鼾息にして而して例の如く一床此夢談あり看官決して此說を信ずる勿れ

## 秋吟文

業寂僧都書を擲つて而して喟然として嘆じて曰く嗚呼寂い哉……秋此風は颯々瀟々と吹て腹は鳴りて臍は答ふ類は荒きて骨出づ天下を知音なし誰あつてか我を尋ねん芭蕉磬て雨此來る事を知り萩葉搖て鹿の過るを覺る忽ち裙に入つて來るものあり曰く汝人を指し鹿とそる乎怖るゝ勿を我い是れ粹に去て而して妖物にあらず隙蓑姦の熾流に去て所謂銅脈先生とは是れ我あり夫れ昔の京は奈良の京今の在郷は京勝り天に夜遁星あり地に鯰猫合腹の大明神あり勅任四等三百圓の月給は杓前に飛び十二錢銭は筒の中に密し此中衆生日夜に快樂きて老衰さに至らんとそるを知らず僧都獨り何爲れぞ四國猿の饑饉年に遇へるの如く也幸ひ簞狩りの序を誤つて此山中に入る能く我を從つて而して歸んや否僧都問ふ今維れ何れの代ぞ乃ち角太夫知る事を知らざ圍八の正傳をや緒論得て而して聞くべけんや曰く切あり夫れ三都の好事日一日より新たに內證の逼迫又年一年より急あり神武は邈たりて樂久松より以往存して而して論せざ劇場南北倡樓い東西五歩高を曳ひて地震をあし三味線を叩て太鼓とあそ珍々焉たり鑵々乎たり南風の鯰魚炎天に水霧頭を轉ぜれば既に隙迹となる我に今知る所は特に昨夜の蹠のみ逝く者い斯の如きか晝夜を舍て道德亡びて而して仁義とあり仁義變じて粹となる粹極つて而して水を呑む今世に當て天地を震動し鬼神に非常に感覺否奥藝を與ふるものは惟夫れ金錢乎僧都頭を振つて曰く夫れ里は新地と名くるを律僧必ず入らざ店を生洲と云へば精進車を回へる我惟た猿の尾の赤きは知ると雖も別嬪の眉の白きは知らざ否按したる事夢にだにあなし粹矣粹矣夫れ周の諺ざに謂へる事あり善い急げと矣美食は夕宵に喰へ今生苦勞ゑて而して極樂に生れんよりは寧ろ先づ樂んで而して後に地獄とあらん君請ふ木魚を叩け我舶來聲の本調子で艶歌せん歌人終つて之を記す舌は電光の如く筆は風雨の如し娑羅〳〵颯と去て卷をあそ今夫れ三都を捜さば則ち猶僧都の如き者は一兩人あらん寡きは衆に敵せず此集以て之を化さば則ち世界咸とく粹に去て其而地獄の繁昌せん疾く來れ我れと共に歸らん獄囉獅茶顧吏は何事ぞや僧都曰く叔父汾去馬挑燈消し鱈跡よ



お田で……

## 赤貧棒子祭群儀鬼文

維時明治廿年十月日赤貧棒局長兼素寒貧省大臣媼山位裙二等猴爵赤貧小丸ごの

困窮切迫長嘆大息ゑて左手よ缺茶碗を捧げ右手よ空米櫃を敲し飢顔は蒼々皮膚は栗々實よ金路不融通商賣不景氣之大當惑日を以て悉ゑく質屋、米屋、薪屋、及び差配人等の群鬼を無錢山困却寺よ祭る汝群鬼銳勢敢情仮令衝突せべきの舌鋒ありと雖も又振り回はせべきの拳錢なりと雖も暫く其會計は白旗を捲き其提燈の篝火を滅して謹んで予ごの遁辭を一聽せよ抑も予ごの赤貧は穴ゑ陷て而ゑて若干の債を負ひ鉄面皮の以て汝等よ對せ可きの仕儀よ至るものは則ち畜よ劣猴を好み酒色よ溺れ博奕を嗜み且女郎を買ひ藝妓を聘せる等の致せ所よ非ら寺畢竟は汝等ごの常よ高利を貪ぼ飽まで貪慾を遂しふゑて而ゑて曾て奔官等の苦情を顧みざるを以てあり予固と言を喰むと雖も汝等も又罪あり余一々其始末を告げん汝質屋曾て予ごの敝たる温袍を十錢よ當らせとあし將さゑ之を價外よ擯斥せんとせ予強ひて之を二十五錢よ沈めんと欲し踵再三汝ごの店よ到て數回歎願し手を摩ぼ駒を訴へ首べを搔ひて苦を辨明せと雖も汝恬然とゑて聞猿者は如く剩さへ予ごの親戚牛虱子を睥睨して曰く噫汚穢ある蔵絞りと認むるもは則悉く虱卵あり此敝袍又數錢は價あし止む事あくんば則ち拳骨を貸さんはみと(車夫社會五錢をげんゑつと云ふ)何ぞ踏み倒しは甚だしきや予殆んど汝ごの吝嗇は面皮を叩かんと欲せと雖も昨今は鶴脊ゑ腹い換へごのたきを以て憤を忍び怒を抑へ僅よ五錢を握つて而ゑて止む汝知らず平余一衣を與それば則ち身よ纏ふもはい一敝繻袢と半股引とはみ夫既よ寒しと雖も一家寂寞とゑて而ゑて磨を懸るごの如し翠丸大鉢ゑと雖も炭あくんば則ち亦煖を取るゑ由あし予ごの心中苦ゑき事幾何ぞや汝若し恕は一字を知るゑらば則ち典品は



好惡を問はせ一圓金を惜むと雖も亦可あり況んや二三十錢をや然るに汝僅々拾錢を以て我多衣を捕へ且高利を貪り毫も仁心なし狩狼ぼ謂はん平將た狗鼠と呼ばん嗟寶よ[illegible]はせべからざるは無情あり五錢は則ち忽ち濁酒二合鰯三疋ゑ盡き飄然去つて烟より輕し[illegible]勇を敲し寒を衝き而して日よ人力車を挽き東奔西走千辛万苦漸く十錢を獲て以て[illegible]はんと欲それば則ち汝鼻以て余よ接して曰く既ゑ隈月を越へたり今や流を[illegible]彷徨を若し之を聽はんと欲せば去つて之を古衣屋よ問へと汝は無慈悲ある一ゑ何ぞ斯は如きや余今[illegible]は嫁くごの如きを忍んで而して温言以て汝に謝する者は則ち他なし只揭[illegible]布團は亦汝ごの庫ゑ重禁錮たるを以て若し之をも流されなば横死は夜叉婆よ劍突を喰ふを恐きてあり然らば汝[illegible]て典利を促さん奚い來つて損料を貪め余既よ向背は[illegible]ゑ遇ひ殆んど其呵責ゑ堪へぜ汝若し蓋惡を聽とんと欲せば宜しく余よ數日は猶預を與へよ來一月は中旬よ至らは即ち必ぜ利息を償ふて而して附替をゑそべ〻汝固奔官等は在るよ由て而して醜逋を夫れ之を人間社會は交際と云ふ汝よ魚心あれば即ち余汝ごの典舗は在るよ由て而して醜逋を夫れ之を人間社會は交際と云ふ汝よ魚心あれば即ち余又何ぞ水心なからんや汝鬼靈あらば少しく猛省を[illegible]る所あれよ……

汝米店は貧鬼よ汝も又牛泥棒は商賣あり桝屬は即ち必ぜ辛らく代價い即ち必ぜ現なり試よ一升を再量それば則常ゑ五勺を欠く余ごの財産い二升を買ふ事能ぜざるは荒世帶あり既よ五勺を減それば猶大ゑ糊口安を妨害せ今汝を攻擊せる材量を示さんよ汝ごの米を喰ふてより腹常よ楞々而ゑて未だ曾て飽ゑぜ蓋し之を升目は不足あるを以てあるを故よ余其怨を執せんと欲し貧友某は名を借りて正ゑ汝ごの債を負ふ賣ゑ三升五合は價あるを余猶ひて其債を踏まんと

欲そ汝百言を費そと雖も金一錢以て拂ふべきも此あし汝强情〻遲志ふし止まぢんば此空米櫃を掃き行け余汝令道路ゑ死そるも復た汝ぐの米を喰とず汝も又人なり余ぐの死そるを憐まば宜志く舊價を以て佛此回向料と志て余ゐ施すべきあり然らば余一放屁を供へ以て汝此靈ゐ謝せんと……汝餓鬼請ふ果志て靈あらば余ぐの言を容れよ……

汝は薪商ゐ王汝虚大此聲を放つて迫來ると雖も其價額僅々二三十錢ゑ止まらぢ曾つて薪一把此價を拂ひ而志て三把を借るは其一價ゐ塵積つて山と作り遂ゑ若干錢此高ゑ及ぶ者ゐと故ゑ汝等仮〻治安裁判所此勸解を仰ぐんと欲そと雖も擧げて之れぐの證據物件とゐるも此なし……此回たるや汝ぐの山神と余ぐの細君と此葛藤なり……而るゐ汝近隣此好誼を破り余ぐの門前ゑ怒鳴るも此は又不人情ならぢや汝もし聽かざきば余惟糞を祇ぶれ此一言あるも此み汝心を靜ゑ志て聽、一聽せよ余は貧と雖も義理を知る況や復た芽此生ぢべき時ならゑ非らざるをや幸ひゐ若し大金を拾ふ而らば即ち必ぢ速ゑ以て辨償そべし汝聞ぢや人世は即ち七頭八起金錢は即ち解脫窮りなし汝小價を以て余ぐの身を侮る勿ぢ汝暫く顎此青筋を正誤せよ日此火焰を止めて而して余ぐの裏店を脫却そる此吉日を待てよ必ぢ饒倖あるべきなり汝若し此事ゑ聽ざきば余斷然勝手ゐ為そべき一言ゐて放任そべし余又敢て言を飾らざるなり……

汝靈神此存そるあらば余此逆螺釘論を拜聽して默止そべきも此あり……

汝差配人ゑ汝は餓鬼此大統領なり否一大癡物一癡なり指を屈そきば則ち店賃此溜ほり既ゑ三月ゐ涉る一月一歩二朱ゑ志て正ゐ壹圓二朱此金額なり賃も又至大ならぢや余ゐ性極めて狡猾なりと雖も獨り店賃此督促ゑ亟つては即ち以て餓面皮となりぐたし況んや馬耳東風



視そべけんや若し佛國王族此如く逐放讒案でも提出され茶又身を容る可き此地あし余此店賃を拂はざるや頗る裏店社會ゐ名あり之を以て又店請を托そべきものなし是汝ぐの具さゐ知る所あり故ゐ余は醫を天ゑし頭を地ゑし三拜九拜頓首災排敢て勸辨を請ふ余此言葉如し蟲さゞる所あらば補欠として豆藏即ち賞牌付此阿房經此坊主を併も秋葉此原か佐竹此原か若志くは島原より備ひ來ると雖も敢て鳴謝せ猿屈縣や止ひなくんば即ち家傳此鼻藥を調合志て汝ぐの怒胸を鎭伏せんと志鼻藥は即ち余既ゐ之を備ふ即ち捕縻五枚と昆布一把となる是れ歲暮の寸賂ゐ過ぎぢと雖も實ゐ夫婦此両褌を與志て購ふ所此者なり品は即ち粗なりと雖も志志は即ち厚し汝餓鬼靈蹲あらば余ぐの志し此切あるを以て幸ゐ恕そる所あれよ……

玆ゑ貧棒局長某又更ゐ汝等群餓鬼ゑ對し岩猿屈から猿も此ゐ汝等孤年を以て尋常の旗晩とゐ志敵東京一般大不景氣ゐる事恰も水あきゑ舟を行り兵なきゐ戰ひを挑むぐの如し金融全く杜塞し商店總て閉ゐ志貧棒社會此みあらぢ金看板を掲る連中と雖も又首此回らざるも此多し加之らぢ昨月祝醜兵の怒ゑ觸れて萬戸一灰金融ぎそ〻〻絶て復た一歩此往來ゐし其甚だしきは即ち三圓ゑ廿五錢此利子を收むるも此あるゑ至る貧棒此腹裾木を以て屠るゑ若し汝等固と余ぐの懷中を知つて余を欺らゑ呵責此土獄ゑ投ぢ何ぞ殘忍薄情此甚しぢや汝等鬼此名を負ふと雖も要そるゐ是れ婆婆の、鬼ぐり八大地獄此鬼は死人を責むるを聞くも未だ活人を責むるぐ聞かざるなり然るゐ汝等口ゑ慈焰を騰ら而して奪ひ去らんと欲そるの勢ひは三津川の奪衣婆より鋭し凡そ借方の通義たるや借る時は則ち地藏となり貸ふ時は則ち閻魔となるものは常あり然るゑ汝等貸方の身を以て却つて閻魔と爲つて而して同

責を逼ふそるは第一政府規定の貸借條例は原則ゑ悖るもと謂つべし汝等若し再び攻め來る事あらば余は留守の二字と不仕合は三字とを以て哨兵線とそ汝等又若し乍レ恐は二字を捧げて兵を法庭ゑ擧るあらば余は即ち財産限は三字を以て敢て立派ゑ返答せんとと夫を汝等群債鬼よ尚くは嚮けよ

## 送娼妓之病院序

明治二獸年九月廿九日鼠文散士を醫は用心ゑ困り避けて東藍根學は海水浴ゑ遊ぶ歸途拄げて花街ゑ入る醉興氣動ゑ乘ぞるのみならぞ股間は奴馬的頻々饑餓を出訴そるを以て欲湖は酒蛙と花院ゑ登り而ぞて居幾と爲る後朝土曜日ゑ適當そ娼妓等將さゑ病院ゑ至らんとそ因て愚弄半分之ご序を作り小粉の紙ゑ筆染めて其辭ゑ曰く猿は尻眞赤と雖も自ら之を知らぞ反つて他は尻は赤きを笑ふ牛は醫漿尿と雖も自ら之を厭とず反つて他は醫の塗尿を厭ふ是れ所謂火山の鼠は其黑きを知らず糞土は虫の其臭きを知ら猿の謂ひある乎實ゑ思ふゑ上い圓助は花魁より下い二十錢の蠱所預は踏張ゑ至るまで皆ゑ主人の内檢査を厭はず反つて醫者の手でピンセントを進入し丁寧なるゑ世話ゑ係るを厭ひ小言だら〳〵病院ゑ至り頗る不滿は色あり就中酒蛙突ゑるい諧謔を玄牝の門頭ゑ施し四邊の毛草を把つて東髮とゑし或い半片を剃り或い目鼻を描き以てゑ醫者先生を愚弄そ其爲ゑ所皆過てり矣嫁倒惟る〻昔し〳〵の其昔し唐堺人の國を治ひや德澤洽く禽獸ゑ及ぶ後世の飛び揚るもの之を賛め鉄瓶ゑ銘し鼻涕紙ゑ書し傳へ以て自惚鏡と爲す焉今や大賢明政府新政を施し其德澤啻ゑ禽獸ゑ及ぶゑ保護は厚き孫提の如くゑ世話を燒て呉そるふはみならぞ蠱々ど爲て諧謔の不動産物ゑ及ぶゑ保護は厚き孫提の如くゑ世話を燒て呉そる事二階の妓夫ゑ伯母さんの如く丁寧反覆臭氣を避けぞ幺麼の梅毒もゑらしめぞ好しゑ醫を大川ゑ洗ふご如く是れ獨り諸裙は幸福のみならぞ亦我蠅漂碌王の幸福あり若し夫れ政府の大きゑゑ世話玆ゑ及はずんば諸裙安んぞ●點の玉帳ゑ多きを見るならん（女郎ごゑ茶ひく晩の多き時い玉帳へ●玉を付るゑり）諸裙等苟くも鼻柱を取らん事を願いぞんば則ち他の尻を笑ぞ而ぞて其醫を厭ひ以て政府は慈仁滅法あり難きゑ懇着し轉々狐舞しゑ醫者ゑ願み檢査を受くる事を爲せと」時ゑ鼠文は相方屁固鶴い煙管をとと煙草を捻り之を燃し一吹予ゑ與へて曰いく「何故ゑ前はんいッー憂心いるんざ升のョー」と是ゑ於て暫く別袖を惜み獨と暗燈部屋ゑ入り不景氣的面をゑぞ是ご序を作る既ゑ稿を脱そそば金龍山の入時の鐘いッー〳〵……



## 吉原青樓記

金龍山は北ゑ青樓而り吉原と号そ前ゑ八町の土堤を抱き遠く隅田川の流れを帶ぶ來る四手鶯ゑり遥る頭巾大盡ゑと彌ゑ驕り野暮盡そゑ似たり此町ゑ遊ぶや孔子も粹とゑるを願ひ釋迦も振られん事を恐れ親父い山神を振捨て息子い勘當を忘る人と云て此街ゑ遊ば猿も其人ゑ走て人ゑゑらざるゑり宵ゑ人ゑらざるのみならぞ又偏ゑ山家の猿ゑ似たり。ぞんそ。やんそ。おまはん。わちき等の妙音を聞けば則ち異見折檻の野暮を攝いぞ忽ち馴染深間の切ゑるを樂しむ八文字は道中い人目を憚かそ引舟禿洗燈等美を盡し善を競ひ中は町ゑ輝く待合そる者而り口舌ものゑり漫々ゑて恰も天人の集るご如し此花街を徘徊それば更ゑ夜更を知らぞ已ゑ又「ちとゑちら〳〵」のゑ言葉ゑ從ひ閨中ゑ入れば獨と來臨の遲きを待兼て幾たびか

心お廊下のパタン〳〵お悦ばしむ花魁徐々と來るべ伴り以て狸寐入をなもおやお前はん狸さ升のフン狐の癖よ狸寐入もねへ盲獣這入つて起そゞの娼務だろう達てあんまり克くお眠てな升からサー……喃漢と乙お ちん配剤の娯楽宜とい實以て安くいねへゞの是れ腐敗儒者抔の夢よゞよ見る能は狼所なり嗚呼粋なるかお〳〵……願くい西京娼妓お長崎の衣裳を着せしめ東京此張りを持せて大坂此揚屋お遊はんとは實お我蠅贊成〳〵ヒヤ〳〵喝采宜おるかお獣郎嗚呼夫色情の君子東京娼妓の張りよ陷らずんば誰か又傾城の貴きを知らん……仮令花柳大博士此名を得るも猶ほ居績の長きお誇る矣……

## 怪猫魔狐合戦裙談

失れ怪猫の魔狐お於けるや同じく怪獣よ籍して共よ妖媚を闘ぎ動もそれべ仇視そるの勢ひあり蓋し互お猾智を逞しふして他人の糧を掠奪せんと欲そ此野心あるよ由つて近頃白狐巣を各處お營み而して專ら妖術を施し跋扈猖獗往々怪猫の國境を侵冪まて以て其糧食を掠ひる事蓋し少々よあら猿なり故を以て大お怪猫と隙あり猫湖苦此代疑士たる糊苦怪醜妓員荐りよ狐國征討此建議案を妓員連署まて之を妓院長お提出そ姉猫股王遂お葉痴門鈍狡此兵法を以て征討此命勅を下そ……

猫山班助紅裙隊お長たり猫田赤藏緋褌隊よ將たり猫川三毛麿奇轉隊よ將たり猫村白吉紅粉隊お將ぬり猫野ん賣遊撃隊よ將たり其他放屁黄屁各々一大隊之よ副ひ慾深猫吉總督よ本砲仁輔代參謀長たゞ其軍統べて三萬三千三百三十三疋振旅まて先づ柳橋の本營を發し錦帶の旗は翩々と去て風よ飄へり鳴絃の聲い經霜と去て天痴を震動し猫非〳〵トーシャンスナレド



虎を欺くれ勢ひあり於是乎狐國大お驚き直お敕使を王子稲荷を岩稲荷及び袖摺稲荷妻戀稲荷等此各社よ派遣し以て戰勝を祈る而まて全國の各痴夢臺お電報或い電話氣を以て急お野羅狐を驅り集め大お兵を督し九尾白狐助大總督とおり赤皮困太郎參謀たり更お又閻魔の廊下お至り援屁を請ひ以て猫兵を魔窟ケ原よ邀へ既よ去て両軍戰ひを挑む尼武〳〵狐武〳〵奮撃突進縱横お入乱れ両軍の放屁三十斤のッルップ砲を一分の間もおく發射それば其聲嚮々天地を動おし山岳爲お分裂せんとそるの景況おまさ既お去て猫軍此緋褌隊は乱そて春花雨よ和し飛ぶゞの如く狐軍の赤尾隊は敗そて紅葉風よ乘じて飄へる如く紅裙隊い九尾隊と尻を接して又尻を出し紅粉隊は白尾隊と闘で雪又雪を吹き飛ばし或い進み或い退き一勝一敗輸贏未ゞ決せぎ時お一勇の猫あり利爪を揮ひ大喝一聲狐軍を罵つて曰く你狐賊等狡猾日一日より甚だまく其不届至極おる怪獣社會蠻狐苦公法の規則を犯して密カお其尾を賣り豈當ゞ我徒鑑札おふして働き三絃を待合茶屋の階上よ枕と去て眠る者あるゞの如き此比おらんや往々我ゞの範圍を侵冪し我ゞお客を横奪し恬然知らざる者此如し何ぞ洒蛙突此甚しき乎昨今游客頗る經濟家そおり你等ゞの尻を以て經濟向此游とおし遂お汝騙窃よ陷るも此幾千万人おるを知らぎ故を以て猫國日お襲へ糧食月よ乏しく殆んど將お綵纈の浴衣を典そし盡さんとそ其悲み與越も當おらぎ狗猿も及ぶぎ敢て復讐の帥を發し你等生を欲せべ速カお降旗を掲げ以て我軍門お降れ然らざゞべ我將よ三尺棒公の援を乞ふて悉とく你等ゞの巣窟を屠らんとそ你等何よく辭おるか一白狐八方お尾を振り猫軍を一睨去て奇案〳〵然と罵つて曰你奴羅你武智等謂んで余ゞの言を聞け你元絃歌を以て其職そなし其尻を賣るの職よあらざるお

り然るに今の猫は腰抜猫とあり事ら轉れ一字に小判を攫まんと欲し彼の娼妓と何ぞ擇と
ん其最も狡猾なる者い猥りに鯰的の鼻毛を讀み恣まゝに神士の髯毛を拔き其月給を奪ひ
其尊閨を逐ひ傲然人に向つて其權品を驕る其罪却つて我仇より深し名い猫なりと雖も其
實い則ち寐兒なり……轉によつて之を論せば寧ろ我同穴の狐たりと謂ふも亦可なり
是れ無名の軍を顧起し我國に寇せんと欲そるの鐵面皮と謂いん之を斜圖虞と謂いん嫉汝
等巧に紅粉を塗つて其黠面を掩ふと雖も汝の尻に就て之を問へ必ず一点潔白れ尻あからん
你速かに三舍を避け其罪を謝せ可きあり猫憤然牙を露いし曰く你白狐猶よく我を嘗と謂顧ん
と欲そる歟你ごの面目を却つて鉄甲船より厚し你等三尺棒公の狙擊に遇て十狐一斃赤白伍を
なし赤恥を白晝に晒らせ者凡そ月に幾回ぞや你猶未だ懲ずに又其尾を賣り又顯はれ又賣り
其底止そる所を知らず你に因て獸社れ頽敗浮風いよ〳〵瀰蔓豈夫れ之を伐た猿を得べけん
や豈夫れ之を懲らざるを得べけんや我軍棒政府に代いり之を討つ你等退いて其罪を顧ゑ幸
ひに悔ゆる所あれよ狐啞然冷笑して曰く你又寐言を吐く事勿れ何の面目ありつて斯の大言を
發そるや爾等亦屢々縛に船宿に就き捻に待合に就くと雖も恬々として恥る色なく轉んで
而して又轉び七轉八倒遂に醜態を新聞紙に晒らさるゝ者常に少なからず猿なり爾等我ごの臭を
知らず却つて他れ臭きを笑ふにと之を鐵皮面れ親玉と云はんのみ我豈鼠か下風に立つへき
ものならんや一罵一〳〵百更に其勇を皷し両軍又遇ひ爪牙相接そ偶ま〳〵老狸婆あり両軍れ間
に入り和を結ばしめんと欲し先づ猫軍に到り而して說いて曰く夫れ狐軍いい最後の尻あり
戰究れば必ず發射せん其毒以て貴軍を殺そに足る故に寧ろ和戰に如かず猿あり亦狐に問ふ

て曰く猫兵いい銳利の爪あり戰ひ破るれば必ず爬く其利以て狐皮を破るに足る寧ろ平和に
鹿猿に両軍漸く之を容れ遂に狸寐入とあつて而して戰止む維時い明治二十年傳十月王れ
一日なり……

## 天保先生之傳

先生性は銅氏名い錢字は孔方天保と號そ嘗て鑛山れ人に本金氏に出づ分親して而して姓
を銅と改む幼ふして鼎鑵盤器の業を好まず曾て幕府の儒者造幣先生に隨ふて而して學ぶ造
幣先生其質を好み擧げて省陌通寶とあそ以て世に通せしむ人とあり容貌長圓顏色拙て黄美
安居を好まず日々夜々諸處に回り其行歩れ輕捷飛ぶがと尙羽翼あるが如し其走るがと未だ
嘗て其足をみず貴賤貧富の人を論せず而して交ゑ美惡清汚の處を避けず遊友連朋逝せざる
所あし或い鉛鼎の中に潛み或い橐籥の裡に出攻そ其入るや速かに去て其出るや又速かなゑ
能く嚴毅の顏を解かゝめ能く發き難きの口を開かしむ能く飲食せしめ或い眼を歡ばしめ耳
を樂ましむ此もに人先生を見れば則ち喜ぶ先生を見ざれば則ち憂ふ其人に慕いるゝ又知
るべきあり當時諸銅貨中に所つて其名聲最も世に鳴る近來諸物價少き沸貴れ兆あるに當
り諸銅貨一時大に昇進そるも先生獨り學らず當に學らざるれみならず其位二級を貶せられ
間もなく霹靂一聲先生れ頭上に落ち遂に非職とある嗚呼夫れ屈原ごの清潔の水に惑ふにとを
嘲り介子ごの龍蛇の歌を吟ぜるを笑ふ嘗て云ふ夫の上德は德あらず其光を和し其塵を同ふと
是れ之を玄銅と云ふと……世人先生の非職を聞き落膽殆んど措く所を知らず我蠅寒生
深に一層の感覺を與へらる世人又然らんにとを

化六なる者名は棒鱈字は鈍馬哩々天皇嘘八百代奴痴面彌次郎兵衛の玄孫なり世々神田八町堀に住む人となり無我夢中常に片羅を以て拭涕紙となし敢て以て意とせず唯々婦人に至つては其飽を知らず時に「極好なる男だよ赤飯屋の看板も宜しくと云ふ樣な顏向で……喃嘆と爪彈きせらるゝ事其統計表を審査時一日中一、二三五の多に達せと豈又恐れ猿屁糎や是を以て常に皆はへの字をなし口は常に荷牛と五同樣涎を流せと其ミえを助兵衛に加ふる者なる又知るべきなり父阿烏吉容て其弟開八を去て九尺二間の身代を嗣ぐしめんと欲せと父死せるに及んで開八則ち化六に與ふ化六曰く君ぐの此家の財產を續ぐべきは亡父の命令なりと堅く辭去て遂に脫走せと開八も又嗣りを肯せず而去て羽衣なる去の仙人氣取りて山谷に逃る是に於て乎其親類大工の八、左官の熊、飴屋の勘子等と計り裁判官れ指圖に據りて總領れ甚六を立つ……

於是化六開八の二人橋本町れ願人坊等猾戀れ指南をせると聞き乃ち其夥徒に投じ日日淺草両國、島原、秋葉れ原、佐竹の原、等に技演せ既にして化六開八に謂ふて曰く今や文明開化の勢代に當り田舍の蜻蛉も民權を唱へ東京の車夫も自由を稱せ我蠅と雖も三千七百余萬の一人なり而るに濁業を以て自ら處せ眞に人參具足なり宜去く業を轉ずるに鹿猿るなりと開八は則ち大神樂の親爺となり化六と貸坐敷の妓夫となる……

一日化六娼妓の午睡去て大切の不動產を暴せを見て戲諧に七色唐辛子を盛る娼妓刺痛を覺へ驚醒し怒つてこをお樓主に訴ふ化六大に其罪を怖れ亡げて島原の淫賣家に隱る後ち又更に



新橋の妓奴となる……一夜艶的の爲に應來を媒妁し功を以て等外一等に拜命せ明治十年三月西鄕隆盛叛旗を鹿兒島に翻へせに至るや化六之を聞き驚き懼を即日帽子を掛けて面して去り行々墨水の濱に吟ず顏色突出其風采恰も荒布の行列れ如し途に開八遇ふ開八曰く兄は百以當の一官吏にあらずや何故に此邊に蹰躇せるや……化六曰く西鄕翁事を鹿兒島に舉ぐ必ず事變上國に及ぶべし僕卑賤と雖も一ッ官員なり……若し私學校生徒の爲に闘りに去され茶ァ即ち性命も危し……是を以て好んで猫と鯰を喰へり……兄未だ聞か猿か本月三十八日を以て閣々珍聞業を開くと蓋し往て賴まんやと我社に來つて探訪者あらん事を請ふ乃ち延見せるに堂屑屋に見倒させると雖も等外一等先生とへ些と買過ぎんに依つて其履歷を聞くに前事れ如し社長以て爲らく彼の經歷せる所のものゝ本社の穴を穿たんと欲せるも此のみ彼を以て探訪となさゞ必ず妙臭異變を嗅ぎ來るべしとて月給八百圓を以て探訪に任ず幾何もなく探訪長に進ム年俸金貨一万五千弗を給せらる凡そ本社珍聞の紙上艶的の髯を扱き下へ藝妓社會牛屋のお傳婆揚弓店の莫連等政府の稅金徵收に於ける如く水も洩さず皆化六の探訪に係る故に此れ如き奇密を得て其任に稱ふ事恰も鯰鰌社會の電信柱に於けると同時に去て談ず屁唐猿れ狸靴にあらずや

## 椿幣先生傳

講師の所謂豪傑なるものゝ赤手蛟龍を捕へ大喝一聲虎を叱吒せ徒らに其仇を叩き鳴らし眼ゝ瞋つて八百善の皿より大きく口を開けゞ則ち曰く木村又藏曰く宇治川の先陣曰く四天王但馬守曰く孟賁と……豪傑ゝ則ち豪傑なり然りと雖も我蠅以て之を觀るゞ皆向ふ見

その猪武者よして眞の豪傑と謂ふよ値猿あり

夫れ眞の豪傑と云ふものゝ坐あゞら天下をして或ゝ強く或ゝ弱く人命をして或ゝ活し或は殺し其生殺與奪權を握る　天皇陛下も宵あらざる位意よ隨としむるみそ是れ眞の豪傑あり其人ありや方今只一人あるのゝ曰く紙幣大先生是あり……

充生名ゝ札字は片羅金貨此分家あり慶應四年を以て西京お生る賦性沈靜寡言よして容姿顔る片羅〳〵然たる恰も妍嬋ゑる婦人の如し偶然之れよ接そをば小兒も又玩弄よ勝もべし常よ翡翠龍鳳の繡衣を着し身よ大日本帝國政府出納局長及び銀行局長との印鑑を帶び手車よ乘り天下よ往來を大腎鹿族も之ゑよ遇ゐば屢を折り禮を卑ふし以て待そ若し熊公のれ腎を拭ふと命せば謹んで命を奉ぜ藝妓も之を見れば二の膳を据ゐ布團を温めて以て待ゝ娼妓之を喚げゞヤイノ〳〵の文遣ひあら〳〵〳〵もしモ矢の如く尖出野郎印度人の見本も宜しくと云ふ樣飢痴男と同衾と命ぜれば則ち喜んで之を奉ぜ指令の及ぶ所高山と雖も谷底とあり海の眞中と雖も待合茶屋とも揚弓店ともあらしむ九尺二間は金屋と變じ山神化て令閨とある宿六轉つて殿樣とある等外先生は奏任よ進む其威力既よ斯の如し人望よ於ける亦然り假令は兵卒の軍よ在りて陣を陷入れ敵を叩き殺し手を失ひ足を落し德利然たる半人間とあるも屈せぜ厭ゑず大將の脛首を獲んと欲そるものは先生を思ゐゞあり燒手書生ゞ萬里の怒濤を破つて歐米よ行き卒業免狀を得んと欲そるも又是を先生を省えればあり我蠅新聞木葉記者ゞ鍛錬を拔き出し條例違背あんかんと石川島へ投込まれ三度の麥飯も七分よ三分菜葉の香ゞ匂ひて〳〵〳〵として又時よ大法螺を吹て猫や狐と素爺狐狸夢と巫山戯散らそも皆是を先生の爲めあり……

其他永年を願ふ貪吝爺より以て天麩羅を立ち喰ひそる丁稚小僧よ至るまで片時も先生を忘〳〵者あし由之て觀之ゞ今日の我國は先生よ憑つて以て國をあそ人民は先生あつて以て生を安んず故よ一朝先生の震怒よ觸るゝあらゞ則ち人命ゝ以て逐轉し邦國ゝ以て斜よ造作付貸店のふ札を貼付よ至る社會の興廢存亡を只一身よ擔當そる總理大臣も千舍を避け豈夫れ眞の豪傑と岩猿屁縣や……

先生一日運動かた〳〵銀行よ至る偶ま〳〵舊友金貨と久振りよて對面そ互よ無病息才を問ふ……外ゝ一言半句を吐露そるよ遑あらぜ且互よ其威望を博せしを賀そ……先生曰く盛ある者は必ぜ衰ふ僕今や一億八千余萬の眷族を率ひ以て天下を蹂躙そと雖も其實滝反紙と一般よして只一時の便利上鼻涕を拭ふよ過ぎず顧ふよ五年を出でずえて必ぜ君の風下よ立ゑん淮陰侯の曰く狡兎死し走狗烹らると僕豈又神田川の傍か若えくゝ佐久間川の畔よ烹られ猿を得んや金貨慰めて曰く勢ひゝ將よ然るべくも僕も又此財政不整の世界よあるを愧ずる故よ先生よ先ち西海を踏んで死せんと欲す……君幸ひよ念ゝ〳〵勿れ先生之を義とし是より常よ歩を金貨よ讓る此れ金貨百圓を以て紙幣百八十圓よ換ゆる所以あり

## 鶴の說

昔し近衛帝の時怪物あり猿面よ志て蛇尾あり且虎身其啼く聲鶴よ似たり因て名づけて奴惠と云ふ世傳へ以て奇獸奇体とあそ然れども此は特お怪化の等外先生よ志て敢て怪しよ値猿あり今報者海を見る目お闖を津お迷ひ取舍定りあし其頭髮は英佛富强の如く其鬚髯は嶮お

んぞは糞を喰へ闘羽那破烈翁の如く其腹外は豐大闊の如く其腹内は芥溜の如く……自ら以て思らく我おそ世界無二一子の相傳日の下開山前代未聞無類飛切大極上々の別品塞晒一本生き別製念入特別格別(否違つた)……併も勳章龍紋付きり〳〵穴着の大豪傑と稱し曰く此事俳山翁之を失そ聖東得たり曰く岳飛は是ならぜ秦檜從ごのふべし其慷慨は則ち天保錢より時むべし無媚は十圓の片羅よりも貴むべし分て而して之を言へば理りあるよ似たり綜て而して觀之べ少も條理あく恰も陽物を把つて首とおし首を將つて股間よ挾むごの如く頗る茫乎と　て天を欺き人を誤り徒らよ食殿の建立の爲よ此刀筆を振舞し此お口饒を皷そ故を以て終身悲歌感慨の徒よ叱られ果して其事の表裏反覆飽陳漢あるを知らず之れ是を命じて亦奴惠と云ふも敢て不可おあるべし果してあくんば此を勅任の怪物あり今源三位頼政をして之を射せしめば果して何等の給月(チット筆ごの江ッタ)弓術を以てそるか嗚呼……

## 不良軒出連助先生之傳

お丹痴夢ふして天下の騒動を起し紳ふして而して無茶苦茶ある乱暴をおそ社會おをなきはおし之を要そるよ不屁噴嗢々々を乱痴機の間ふ洩らさんと欲して然り是を以て陳陟は漢の高祖の提燈持とおつて而して終り石田三成は德川家康の犢鼻褌擔きと爲つて而して死そ然りと雖も其犢鼻褌擔き提燈持と爲る初めの心之を願ふよ非らぜ皆南面して孤と唱へ天子將軍とおらんと圖太く仕掛ると雖も如何せん當初之をふ敬ふる向ふ見ぜを以てそる者あるよ由つて事頗る飽痴喪姦よ渉り終よ帽子の蠆を紛失そるを致そ豈笑止おらざらんや或人曰く向ふ見ぜを敬ゆるは誰ぞ曰く不良軒其人おり不良軒性は飛田名は無暗不良軒い蓋し其別号おり世々謀反人の腹中よ衣食し貪性剛腹おして野暮乱暴を以て自ら任じ竊ふお邪氣を貯へ天下不平の徒を待つ其氣象たる常ふ冥々ぜ中よ寓し而して政府失体の間ふ發そ秦の始皇之れふ遇ふて阿房の肩書を遺し平濟盛之をよ觸れて舉族以て壇浦よ溺る宋の高宗之よ感て闇弱亡國の基を開き德川之れふ魅入られ以て祖宗の株を失ふ古來英雄豪傑ごの先生の氣ふ出つ食して縮尻を爲ぜ斯の如し且夫を先生の身体天下ふあるもの娼妓ぜ都鄙よあつて往く所として而して非らざるおきごの如く故よ佐賀よあつては江藤新平を指揮し肥後ふあつては神風黨を使役し山口ふあつては前原一誠を號令し思案橋ふあつては長岡久茂を引廻し芋ふあつては西鄕隆盛を弄し官途よあつては陸奥宗光を煽動竹橋ふあつては近衛兵を尻押し其他尙は近きは福島よあつてい河野廣中を茨城ふあつては富松正安を大坂よあつては大井憲太郎を凡そ先生の滅法界よ於ける勤たりと謂ふべし然りと雖も其身を盆筵ぜ上よ擲出し一六勝負則ち袁彥道ぜ總理大臣とおるは顧ふふ我國昨今ぜ景決猫い櫛ふ進ぇ狐い正室よ變じ鯰的い我威を以て天下を一呑よし八公は天權を以て之を制せんと欲し互ひよ折ぜ合わ猿よよりし其隙を窺ふの故乎然らば則ち不良軒先生の資性果ぜて剛愎乱暴か否やい後日輿論を待たぞんば飛田無暗不良軒おんぜかんぜと斷言そ屁唐猿おり……況んや氣ぜ正たり邪ぜるをや我蠅茲よ之れ〳〵傳を作り敢て同業同臭の滅法者流おらぬ色男先生ふ質そと書うち傍から覗きまむ一人の書生先生おんまり長ねと看客ごおあきふあるよ主人其んおら是ヲ打出ヲ　親釜集……

滑稽さはら一終

明治三十年六月十四日印刷
仝　三十年六月十六日出版

明治三十年四月五日印刷
仝　三十年四月九日訂正再版

版權所有

日本橋区蠣殻町二丁目番地
著作訂正兼発行者　馮里正吉

神田区西今川町二番地
印刷者　山本新吉